



生まれも育ちも福岡の私だが、夫の転勤で、東京、名古屋、鎌倉と各地を転居した後、今年6月に福岡市に戻ってきた。この7年間に「福岡市でしか見られない」都市景観が増えていて驚いた。遠くから福岡市を訪れてくれた友人たちに見せたい場所が増えたのは嬉しい。なかでも、福岡市博物館や福岡市総合図書館周辺の景観は美しい。転居先では美術館や図書館巡りをよくしたのだが、国内の公共の建物で、これほど周りの景色とマッチしたものはそう多くないだろう。

だが、遠来の友人に自慢したい景観設計の一番は、福岡市地下鉄だ。辞書には、「景観」は「風情のある」けしき、ながめ」とある。風情があるかどうかという点で、地下鉄を景観と呼べるかどうかかわからない。しかし、

魅力的で弱者に優しい デザインを

津田 晶子 Aiko TSUDA 早良区西新

魅力的、かつ弱者に優しくデザインされたという点では他に誇ることができるだろう。

他所から来た人は、「福岡市の地下鉄は利用しやすい」という。漢字が読めない外国人や小さなお子もたちにとって、シンボルマークやカラーで駅が分かるのは画期的だ。お年寄りや地下鉄に乗り慣れない人もこれなら安心だろう。パリやロンドンの地下鉄でも主要な駅は凝ったデザインで飾られているが、福岡市営地下鉄は利用者本位。すべての駅の構内だけでなく、車内の表示にもシンボルマークが使われている。たとえば、駅の説明をする時に「オレンジ色でNマークの西新駅で降りて」と言えばよい。海外に旅行した時に、ハンゲルやアラビア文字など、見知らぬ文字ばかりの街で困惑した経験のある人には、福岡市地下鉄のデザインがいかに親切か理解できるだろう。現在、地下鉄3号線が工事中であるが、各駅がどんなデザインを施されるのか、今から楽しみにしている。

お金をかけた奇抜な設計で人を集めるのは簡単だが、注目されるのは一時的なものだ。表示といった小さいなことにも眼を向けて、弱者に対する配慮のある景観設計が増えることを願っている。

みんなに優しいまちづくりはこれからの大きな課題。特に福岡市の最大の魅力は職住が近接し、老若が笑顔で集うこと。それだけにこのエッセーには同感。お互いを大切に。する真心のこもった景観づくりを期待したい。(運営委員 佐藤 優)

